

私たちの人生の中には悩み、課題、試練がある。けれども神は「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と語られる。このイエス様のおことばに信頼するなら、私たちは目に見える状況に惑わされることなく苦難や困難に勇気をもって立ち向かえる事を励ましている。本日はそのような主のみことばから共に教えられて参りましょう。

I. 神のみこころを行うため (45-46)

前回は弟子たちがイエス様に群衆を解散してもらうように願ったが、イエス様は解散させずにパンと魚をもって人々の必要を満たされた。しかし今回は「すぐに、イエス様は弟子たちを無理やり舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダに先に行かせて、その間に、ご自分は群衆を解散させられた。」なぜでしょうか？それは奇蹟を体験した群衆がイエス様こそがメシア（ローマの圧政から解放し、自分達の都合の良い指導者になってもらいたい）と考え、イエス様をイスラエルの王にしようとしたため。「イエスは、人々がやって来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、再びただ一人で山に退かれた。」（ヨハネ 6:15）イエス様の目的は群衆のその期待に應える事ではなく、人々が十字架による恵みの救いを受け取り、その神の国の恵みに生きるため。イエス様は人々がイエス様を王にさせようとする擁立運動に弟子達が影響を受けないように無理やり舟に乗り込ませて向こう岸に行かせた。また、群衆を解散させたのも騒乱を未然に防ぐため。弟子達は訳も分からなかったがイエス様に従い、急いで舟に乗り、向こう岸に出航する。

今回、イエス様は弟子達と一緒にには行かず、群衆を解散させた後、祈るために山に向かわれた。なぜ一人で祈られたのか？イエス様ご自身が偉大な御業を行った後、人々から賞賛され、一国の王になる誘惑に打ち勝ち、神の前にへりくだり、成すべきみこころを確認するために父なる神と深い交わりを持たれた。

II. 恵みに富んでおられる主 (47-52)

弟子達はイエス様と離れての行動は初めての事ではなかったがパンと魚の御業の恵みで満たされたとはいえ、とても疲れていたはず。その中、向こう岸に出航するが向かい風で強風によって湖が荒れ始め弟子達は一生懸命漕いでも全然進まない状況。ペテロ、ヤコブ、ヨハネはプロの漁師でガリラヤ湖の事は知り尽くしていた。けれども夕方に出発したが夜明け前まで（9時間程）悪戦苦闘して漕ぎ、疲労困憊の状態。

私たちの人生にも同じような事はないか？一生懸命に生きていても前に進まず同じ所でもがき苦しんで疲れ切り、絶望感を覚える事はないか？何でこんな大変な時にイエス様は近くにおられず、助けてくれないのかと思う事がある。弟子達も思ったはず。けれどもイエス様は彼らを見捨てたのではなく山から弟子達のためにも祈り（彼らが神を信頼して恵みに生きる事ができるように）無事に向こう岸に着く事ができるように見守られていた。だからイエス様は弟子達が不安で困っているのを見て彼らの所に行かれた。

しかしイエス様は湖上を歩いて弟子達の舟に乗られるのではなく、そばを通り過ぎるおつもりでした。なぜか？それは弟子達にいつも主が共におられ、主に信頼する事を自ら思い出してほしかったため。そのためイエス様はすぐに助けて解決されるのではなく、弟子達が主への信仰を働かせて主に信頼し問題や困難を乗り越えてもらうために、あえて距離を置かれた。※証

そのようにイエス様は弟子達を直接助けるのではなく、見守り、そばについているから心配ないよとご自身の姿を現した。しかしイエス様が湖の上を歩いておられるのを見た弟子たちは幽霊だと思い、叫び声をあげ、おびえた。しかし弟子達がイエス様を幽霊だと思間違えたのは、弟子達が目の前の困難な状況に心を奪われ、イエス様を見失った状態のため、イエス様を見てもイエス様だと気が付かず、ましてや失礼な事に幽霊だと思おびえた。つまり弟子達はイエス様に信頼せずに、自分達の力に頼り、現実を目をむけ、おびえ苦しんでいた状態だったということ。

私達もイエス様を信じていても、イエス様を見失い、自分の力に頼っては限界を感じ、何かにいつも恐れ不安な状態であることはないか？けれどもイエス様はそのような弟子達に「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。なんと恵み深いお方。

本日の箇所を読み以前にも同じような箇所があったと思わないか。4章で弟子達はガリラヤ湖で同じような状況を経験している。前は今回の比ではない死を覚悟する程の酷い大嵐の中にいたが、一緒に乗っておられたイエス様によって嵐を静められ助かったという状況。しかし本日の箇所は物理的にイエス様のおられない中で逆風に悩まされ、どうしたら良いか分からずあきらめかけている時にイエス様は励ましの声をかけて弟子達の舟に乗り込まれ風はやんだ。そして「**弟子達は心の中で非常に驚いた**」とある。

以前にも同じように湖の上でイエス様に助けられた経験をし、その後にはイエス様に信頼して宣教旅行に行き、多くの御業を経験し、そして今回のこの出来事の直前には、五つのパンと二匹の魚の奇蹟（大勢の群衆に食べ物を与えられた）を目の当たりにしているにも関わらず、イエス様がそばに来られても悟らず、まるで初めてイエス様にお会いし、御業を経験したかのような反応であった。弟子達、また私たち人間が如何に悟りの鈍い愚かな者であるかを痛感させられる。※証

イエス様が今回あえて最初に弟子達と舟に乗られなかったのには理由があった。それは弟子達の悟りの鈍さがありました。そのためマルコは「彼らはパンのことを理解せず、その心が頑なになっていたからである。」と記している。

もし弟子達がパンの奇蹟を悟っていたなら、イエス様に助けを求めたり、イエス様がそばに来られた時に助けに来てくれたんですねとか、イエス様が舟に乗られて風がやんだ時には、救い主イエス様の前にひれ伏すなどの表現をしたはず。けれども、弟子達はそうではなく不信仰であった。

イエス様は弟子達が主に信頼し、より頼む事を選び取るのを願っておられた。イエス様は頑なな弟子達に何度もイエス様が主であり、信頼して歩むようになることを教えられた。※証

弟子達がイエス様の事を悟らず、頑なであることがここで裁かれているように思われるかもしれないが、そうではなく、そのような弟子達に主は何度も励まし、主に信頼して歩めるように共に歩んでくださる事が強調されているのが今回の箇所。なんとという恵み！

この「**わたしだ**」は原語（エゴーエイミ）では「わたしはある」の意味。これは神がエジプトからイスラエルの奴隷の民を救い出すため、モーセを召し出された時に神がご自身の事を紹介された言葉。つまり、イエス様は「**わたしが**」その神、出エジプトの神、天地万物を創造し造り、唯一自存であり、あなたがたを愛してやまない者である事を示されたということ。だから「**しっかりしなさい。恐れることはない**」とイエス様は言われた。

イエス様がクリスマスにこの地上に来られた一番の目的は十字架の身代わりの死と復活によって、全人類の罪を贖い、永遠の命を与えるため。しかしそれだけではない。イエス様は人となられ33年間この世で歩まれた。飼葉桶（とても人が生まれるような所ではない底辺の場所）でお生まれになり、私たちと共に生活をされ、人の痛みや苦しみを共に味わい経験された。雲の上の王様ではなく、誰よりも低くなられた王様。そしてイエス様は、弟子達と共同生活をする事で弟子達が神を知り、信頼し、信じていけるように忍耐強く関わられた。

私たちも神を信じ救われても神について完全に分かるわけではないし、順調と思える時もあれば、そうではない時もある弱い私たち。だから私たちは共に集まり礼拝、みことば、祈り、賛美する中で徐々に神の素晴らしさについて知っていく必要がある。もちろん、個人のデボーションの中でも。逆風と思える時も、「**しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない**」といつも励まし共におられるこの力強く恵みに富んでおられるイエス様を見失わず、主に信頼し歩む者でありたい。

Ⅲ. ゲネサレにて (53-56)

「**イエスだと気がついた**」とありますが、人々はイエス様についての正しい認識は無く、ただ癒しや奇蹟を行う者としてイエス様の元に行っている。イエス様が積極的に御業を成されたとは記されていない。しかしイエス様は人々の目的が福音を求めることではなかったにも関わらず、求めて来た人達には癒された。なんとあわれみ深いお方。悟りの鈍い弟子達にも忍耐と愛をもって接し、霊的真理を悟ろうとせず利己的な人々に対してもイエス様は愛と恵みをもって関わられた。そのイエス様に習い、特にこのクリスマスの時、主からの愛を頂き、隣人を愛しつつ希望をもって福音を宣べ伝えていく者でありたいと願います。